

各地で話題の病害虫

シラフヒョウタンゾウムシ

学名: *Meotiorhynchus querendus* SHARP

平成5年5月に北海道斜里郡でテンサイの葉を食害しているゾウムシの成虫が発見され、シラフヒョウタンゾウムシであることが判明した。本種は青森、北海道、千島、樺太に分布し、砂質地の海岸付近に生息しており、農作物に被害を与えることは知られていなかったが、昭和48年に北海道



北海道中央農業試験場 秋山安義氏提供

でインゲンの幼苗を加害することが確認されて以来、パレイショ、アズキ、タマネギなど多くの畑作物に被害を与えることが判明しており、今回テンサイでの被害が初めて確認された。

成虫の体長は9~10.5mmで、後翅が退化しているため、飛翔することができない。

成虫による被害は、葉を葉縁から半月状に摂食するが、作物の生育には大きな影響はない。

本虫は、春期に越冬老熟幼虫が豆類の根部を食害するため、萎ちよう枯死する場合がある。また、越冬前幼虫の食害によってタマネギやパレイショの品質が低下する。防除対策は生活史が複雑であることから、今後の研究が待たれる。

ハスオビキンモンホソガ

学名: *Phyllonorycter rostrispinosa*
(KUMATA)

新潟県の一部フリ栽培団地で数年前から種不明の落葉性害虫が見られ、平成4年春には、発生が多くなり、果樹試験場盛岡支場で同定した結果ハスオビキンモンホソガであることが判明した。

本種は北海道、本州、九州に分布しており、従来ミズナラやコナラの葉に潜り食害することが知



新潟県病害虫防除所 浅野英明氏提供

られていたが、新たにフリへの加害が確認された。

成虫は開張6mm内外で、リンゴキンモンホソガに似ているが、前翅後縁の白色斜条は一定幅の帯状である。幼虫は葉裏の表皮の下に潜り、側脈間にテント状の潜孔を作り食害する。

フリにおける生態については不明な点が多いが、今年の観察では4月下旬に成虫がフリに飛来し、葉裏に産卵する。幼虫は5月中旬から6月上旬に葉を加害し、その後蛹となり羽化する。幼虫が寄生した葉は変形し、6~7月に落葉する。

防除対策は、今後の詳しい生態調査が待たれるが、成虫飛来最盛期に殺虫剤を散布すれば、密度を低下することができる。

メロンの黄化えそ症 (仮称)

平成3年12月から静岡県内の一部地域で、特産の温室メロンに原因不明の病気が多発し、関係者の努力によって防除を徹底した結果、5年3月には発生が終息した。

本病は、「メロンの黄化えそ症」と仮称され、静岡県農業試験場が原因究明した結果、ミナミキイロアザミウマが媒介する未報告のウイルス病であることが判明した。

・アザミウマ類が媒介するウイルス病は、従来から黄化えそウイルス病 (トマトスポッテッドウイ



静岡県農業試験場 加藤公彦氏提供

ルスウイルス(TSWV)) が知られており、広範囲の植物に寄生して、多くの野菜類や花き類に被害を与えている。しかし、今回判明した病原体は、これまでの TSWV とは寄生範囲や血清学的に異なっている。本病の病徴は、初め葉の葉脈に沿って黄化し、葉脈間に黄斑点が多数発生し、やがてえそ斑点になる。果実はモザイクになり、正常なネットにならない。

防除対策として、発病株の焼却処分と媒介虫のミナミキイロアザミウマを完全に防除し、温室周辺の徹底した除草を行うとともに、寄主植物を栽培しないことが重要である。

ナガイモ褐斑根腐病 (新称)

学名: *Cylindrocarpon destructans* (Zins.)
Scholten

平成元年頃から北海道の各地で貯蔵中のナガイモが褐変し腐敗する病害が発生した。これを道立十勝農業試験場で調査した結果、糸状菌の *Cylindrocarpon destructans* によるナガイモ褐斑根腐病 (新称) であることが判明した。

Cylindrocarpon 属菌は、大型分生孢子、小型分生孢子及び厚膜孢子の3つの孢子形態を有し *Fusarium* 属菌と類似している。

本菌は生育適温が低く、土壌中の菌量を測定したところ、高温時の8月下旬まではほとんど検出



北海道十勝農業試験場 田中文夫氏提供

されないが、収穫前にあたる10月以降の低温時に急増し、菌の感染部位である側根基部の菌量が増加する。

病徴は、ナガイモの側根基部を中心に褐色の陥没腐敗病斑が多数あらわれ、それが次第に拡大する。症状は表層に限られ、肉質部まで達することはないが、表面の病斑によって商品価値が著しく損われ問題となっている。収穫時の症状は軽微であることから、腐敗は貯蔵中に進展するものと考えられている。

防除対策は、貯蔵方法を含め、今後の研究が待たれる。